

“伝え合い”の人類学

“ことば”と“言語”
西江雅之

Number 1

二、三十年も前のことになるが、ある解剖学者からこんな話を聞いた。

「幼稚園に入ると、子供たちは先生から体の部分の名前を習います。ハイ、これは頭、これは目、これは耳、といった具合にです。その際に、当然「口」も教えられます。ところで、口という部品は、一体、頭部の何処にあるのでしょうか」

なるほど、目、鼻、耳、唇、舌、などは、確かに手で触れることができるが、口なるものは体の一部としては存在しない。「唇が痛い」「歯ぐきが痛い」とか、「口の周辺が痛い」ならば成り立つ。しかし、「口そのものが痛む」などということはあり得ない。だが、そうだからといって、すべてを逐一神経質に正確に表現しようとすれば、かえって日常生活に支障をきたすことになる。

口と言えば、その内部から出る声を伴って発せられるものに“ことば”がある。人間の声には、“ことば”の他にも、ため息、しゃっくり、叫び声、等々、人間のコミュニケーションの場で様々な意味を相手に伝えるものがあるが、やはり“ことば”に勝るものはない。

人は成長の過程で、身辺から与えられる“ことば”を通じて、自分たちの“世界”の多くの部分を創り上げる。道徳観、人生観などは、その代表的な例である。そして、その世界を根拠にして、様々なことを表現する。しかし、如何に厳格に表現しようとしても、その土台とも言える“ことば”自体が、曖昧さから逃れ難いものである。あらかじめ内容が定義されている科学用語を用いての話のような例を除けば、話者が意図したことが、相手に完全に理解されるなどということは望めない。

文字を持たない時代には、人は自らの世界を、もっぱら身近な人々の“ことば”を通じて形成していた。それが今では多くの場合、“言語”を通じてなされている。その結果は、現実の複雑な世界を生で実感するよりは、“言語”的に正確であることに重点をおいて考えるという傾向が強くなっている。

“ことば”と“言語”の間に見られる大きな違いは、およそ次のようなものである。“ことば”は、特定の個人によって発せられる一回限りのもので、当人の声の質、話す速度、癖、などを伴い、かつ、その場が持つ脈絡に支えられて初めて実現される。他方、“言語”というものは、誰か特定の人物から発せられる具体的な“ことば”と同等のものではない。人々が話す多様な“ことば”のなかで、話者たちが共有しているとされる基盤が“言語”なのである。文法書などで、“言語”と呼ばれるものは、“ことば”ではなくて“言語”なのだと言えるだろう。

“言語”と“ことば”の関係を、別の分かりやすい例で示してみよう。ある場所で開催される音楽会に居合わせた演奏家たちが、同じ曲の譜面を持ってしているとす。その譜面の上に書かれた共有の“曲”に当たるものが“言語”であり、それに則って各自が、その時その場で行う“演奏”が、“ことば”に相当するものとなる。

言うまでもなく、“ことば”から、その話者たちが共有する“言語”なるものを取り出して見せることは、視覚的にも、聴覚的にも不可能だ。しかし、それに近いことを可能にするのが、“言語”を“文字”で表現するという方法である。



写真・西江雅之

ところで、「ことば」が日常生活で中心的な役割を果たしている社会では、伝統文化における価値判断に基づく「納得」の仕方が基本的に重要となる。そうした社会では、たとえば物知り老人や親の「ことば」は、内容の如何にかかわらず、納得がいくかどうかで、受け入れられたり拒否されたりすることになる。理屈は後追いの形で、個々の社会通念に従って付けられる。

他方、日常の判断を、多くの場合「言語」に頼る現代世界では、話の内容がなんであれ、それが言語論理的につじつまが合うかどうかという観点から見た「理解」が人々を支配する。そうした社会では、書物などに「言語」で示されている意味内容の面だけから、論理的に理解されることが期待される。「ことば」とは分かち難い脈絡——話者、場、時間、など——は考慮されない。与えられた「言語」例の中で組み立てられた理屈が整っていれば、それで成立することになる。

地球上には、もっぱら「ことば」に身を寄せて生活する社会が、最近まで存在した。しかし、現在では、全世界で「言語」が優先的だ。

にしえ・まさゆき 1937年、東京生まれ。専門は文化人類学・言語学。アフリカ諸語、ピジン・クレオール諸語の日本における先駆的研究者。東アフリカ、インド洋諸島、カリブ海域での現地調査経験を多く持つ。また、「伝え合い」の人類学というテーマで、現場でのコミュニケーションに関する研究に従事する。現地の人々に自然に溶け込む研究態度で、「裸足の学者」との異名をもつ。東京外国語大学、東京大学、早稲田大学、東京芸術大学などで教壇に立った。

わたしは、一九六〇年代初頭から、アフリカ、インド洋諸島、カリブ海域などで、文字の存在を知っていても日常のほとんどを「ことば」に頼って生活する人々を、訪ねる機会を多く持った。その人々が話す「ことば」から、「言語」を見つけ出す作業に熱中していた時期があったのだ。

そうした土地では、「家」に当たる単語を尋ねても、すんなりと教えてくれないことが多々あった。それどころか、「家」さえ知らない無知な人間が村にやってきたと、哀れみの表情を浮かべて「ことば」をかけてくれる人にさえ出会った。

ある所では、わたしの国の食べ物についての会話の中で「山羊がいますか」と老人に尋ねられた。その意味を深く考えずに「いや、山羊はいません」と答えると、その日のうちに、わたしは食糧が尽きた国から逃れてきた流れ者だという噂がたつた。「言語」の構造が少しばかり把握できても、それが現実の場で使われる際の「ことば」としての意味は容易にはつかめない。

「『言語』分かって、「ことば」通せず」。
わたしが世界各地で得た最初の教訓であった。